

紀 行

再び「南京」で考えたこと

高 屋 定 國

私はこの四月末から五月初のゴールデン・ウィークを利用して南京に飛んだ。中支方面を旅行するには最も氣候の好い時期でも在りグループで行く場合の不便を考えて単独で行った。目的は唯一つ。「南京事件」の真相究明である。

南京事件については昨年、日本の文部省が教科書の検定に際し、日本占領下の朝鮮問題と共に戦時中の中国を始め、東南アジア諸国への侵略に対し、「進出」と言う用語を使用する様に指導している事が明らかになった。それに対して中国、韓国、朝鮮民主主義人民共和国を始め多くの国々から批判と抗議を受け、外交問題にまで発展した。日本政府は、それらの抗議を受入れ、その後、アジア各国を訪問した中曽根首相も、その線に沿って発言している。文部省も特別の処理により「侵略」と言う用語を使用することにした。

しかしながら、第二次世界大戦中に於けるナチスの「アウシュヴィッツ収容所事件」に次ぐ大きな事件として当時世界に報道され、東京裁判に於ても特別に問題にされたにもかかわらずその実体が我が国に於て余りにも知らなすぎると私は常々考えていた。

私の手元にある朝日新聞の本多勝一記者に

よる「中国の旅」、「中国の日本軍」や平岡正明氏の「日本人は中国で何をしたか」の一部に南京事件について書かれているが、不十分なものである。その後、元早稲田大学の洞富雄教授の「南京大虐殺」を手にすることが出来た。本書は、綿密な資料の分析を通じてこの事件について書かれて居り、おそらく、日本に於ては最も詳しい書物であると言える。しかし、日本に於ける文献を中心にして書かれているため、事件の真相の究明にはもう一つ迫力に欠けるものを感じる。その後、当時、南京に駐在していたイギリスの特派員であったティンバリー氏の「外国人の見た日本軍の暴行」（訳者不詳）が出された。

そのうち、ジャーナリストの鈴木明氏や、山本七平氏、渡部昇一氏達が、雑誌「諸君」を中心として「南京事件」は架空のことであると断言して来た。主として洞氏の著書を批判しており、洞氏は又、それに対し詳細に反論されている。鈴木氏は「南京大虐殺のまぼろし」を文藝春秋社から出版し第四回大宅ノンフィクション賞を受賞している。本書は、南京事件を架空のこととして、当時従軍して生残っている人達に逢って証言させて書かれたものである。この方法は全く作偽的で

ある。この事件で責任を問われた松井石根將軍、谷將軍は処刑されている。関係者はこの事を知って居り自分に責任が振り掛ってくる恐れのあることを正直に話すだろうか？

又、正直に話したとしてもその人達が真相を全部知る立場に在ったとは考えられない。当時、日本側は加害者であり殺す側である。この様な事件を調べるには被害者であり殺される側からの証言こそ大切ではないかと思う。

この様なことを日頃考えていた時、昨年八月初旬、大阪、上海、江蘇經濟交流協會第一次考察團（調査団のこと）の一員として約一週間にわたる上海の調査の後、南京を訪問した。丁度その時、日中間では教科書問題が外交レベルで話し合われて居り、私達が、南京に着いた翌日より「南京博物院」で「侵華日軍在南京大屠殺罪証史料展」が開かれることになっていた。私達一行は、準備の出来上がった前日の夕方、館長の案内で見学することが出来た。恐らく、一般公開の時に、南京の市民とは一緒に見られなかったと思う。それ程、この展示場には、一九三七年十二月の南京事件を中心として、日本軍による虐殺、暴行、殺人等の生々しい写真が会場に展示して在り、国際赤十字社の調査報告書の写し等が

展示して在った。又、中央には南京で日本軍が降伏の際に使用した机も在った。

私は、その展示品をすべて写真に収めたが、何しろ特別のことで充分な写真が取れず、私としては不満足なものしか出来なかった。しかし、私達一同は、中国側の親切な案内にもかかわらず、気の重い一時であり、誰一人として物を言う者は居ない。一体それは何だろうか？ この事件について私は同行の人達と話し合っていないが、私は多くの事をその時考えさせられた。私は一九六〇年以来、訪中は八回目であった。日中関係については少しは知っているつもりでいても、この時程考えさせられたことは無い。それは何か？ 私が日本人であると言うことである。

今再び東京裁判が上映され、歴史を見直されている。このことは今後も続くであろう。それについて人それぞれ考えが在ろうと思う。しかし、この前の戦争、殊に日中戦争については、日本が侵略者であり加害者であったことは否定出来ない。多くの日本の国民にとって、戦前の政策決定過程には参加していなかったが、しかし、行動として多くの隣国の人々、殊に中国の人々に迷惑を掛けたのは日本民族であったことは疑問の余地は無い。

日本民族の一員としての責任感が心の中より大きく渦巻き、私の心を暗くしたのではないだろうか？

帰国以後も、戦争責任、民族としての責任、加害者と被害者、強者の論理と弱者の論理、日本人は原爆の被爆民族であり、同時に戦争の加害者である等次から次へと「南京事件」をめぐる私の考えはふくらんで来た。

もう一度じっくりと南京事件の真相を知る必要が在ると考え、中日友好協会や中国対外友好協会に私の意図と希望を伝えて特別の配慮を待っていた。幸い、私の考えを理解して頂けたのでしようか、こちらの都合の良い時に来る様にとの招待状を受取った。この様な経過を経て私は始めに書いた様に単独で南京を訪れた。四月三十日、大阪空港を出て二時間余りで上海空港に着いた。何回も乗降した上海空港であるが、いつもは数名の団体で案内者が付いている。今回は全く一人で資本主義国と異なる体制の雰囲気、空港の警備員や役人の服装や行動に出て居り、少し心細かった。しかし、これも全くの一時であり、以前より顔見知りの中国人民対外友好協会上海分会の通訳、周金美女史の笑顔を見てはっとした。外国旅行に慣れている私でも、出迎えが

無いと心細く、又淋しいものである。その上、今回は、南京からわざわざ私を上海空港に迎えるため派遣された中国対外友好協会江蘇分会の通訳である蔡錫生氏の出迎を受けた。

上海空港に降り立った私は、今迄の訪中の様な親善訪問でなく、真直ぐに南京に行くことであった。中国側も私の今回の訪中の目的をよく理解してくれて居り、午後の南京行の急行列車に乗った。約六時間余りの汽車の旅であったが、車窓より見る風景は余り変化がなく、時々停車する蘇州、無錫等の都市を除いてのんびりとした古くからの中国の田園風景であり、時々運河に帆を立てた小舟の往来が日本の風景と違っている。新しいレンガ作りの二階建の農家が目立つ。これも近代化による個人請負制による都市近郊農家の所得増加の結果である、との説明を通訳氏から聞く。しかし、車窓から見る限り畠に働いている農民の姿を見かけることが少いことに疑問を感じた。上海―南京間と言えば、中国農業の中心で豊かな地帯である。又、人口的に見ても、耕地面積は一人当りで比較すると日本より少いこと、その上、四月末の季節を考えると、農場に働いている農民の姿が余りにも少いのには驚いた。この疑問は今でも持つて

居り、恐らく中国農業の持っている構造的欠陥―農業の集団化にある様に私は思う。

通訳氏と二人で六時間余りの長い汽車旅行の間、四人組追放以後の現代中国のいろいろな方面について話し合った。彼は何回も日本に來た経験も在り、比較的公平に両国の問題を見て、現代中国の諸問題について卒直に話してくれた事は嬉しかった。しかし、私の感じでは、中央で言われた事と現実との間には相当の開きが在り、近代化についても国の中央が言っている様にうまく行くとは考えられない。殊に、四つの近代化にしてもそれを荷う人間と組織についての考え方なり路線が不明確の様に思われた。国作りは、日本の明治維新と同様、人作りであることをつくづくと感じた。しかし、この事に手を付けると一応近代化で定着した鄧小平路線にひびが入りかねないと思う。しかしいづれこのことが表面化する日が近いと私は思う。通訳氏は出来るだけ現状を私に伝えようと努力してくれるが、彼の話は現象的な事で私が問題としている党及び国家の路線については充分話しが噛み合わなかった。これは仕方のない事と思う。文化大革命で紅衛兵や党に苛め抜かれた現代の中国の知識人は、脱政治で、自分の専

門分野に閉じ籠っている様に感じられた。これも仕方の無いことと思うが、又、その反動が来るのでは無いかと……通訳氏との会話から私はふとこの様な事を感じながら、汽車はいつの間にか夜遅く南京に着いた。

南京では私の今回の訪問の目的に沿ってスケジュールが出来て居り、孫文の中山陵と揚子江に架けられている南京大橋の見学以外毎日午前、午後にあつて「南京事件」の研究、証人、現地調査、資料見学等で、南京滞在中、ぎっしり詰つていた。さすがに、統制のとれた国らしく、対外友好協会の方々がよく準備して頂いていた事には感謝している。

第一日目の午前中は、南京市立博物館の一室に案内された。当日はメーデーの休日で広場では多数の市民が集り、処々に露店が出ているところは日本の祭日と思わせる。市立博物館前の広場ではメーデーの集會が催されるのであろうか？ 高官らしい人達が次から次へと到着して來た。私達はその集會を抜けて、そと裏門に行き、休日で休館している古い中国式の建物の一室に入つて驚いた。

そこには、部屋一面、戦時中の日本軍の残虐行為を証明する写真が展示されている。今回は昨年の博物院よりも数が多いだけだ

く、南京地区、東北地区、上海地区等と写真
を地区別に整理されていた。次いで案内され
たのはこの市立博物館裏の事務室の一室であ
った。そこには古ぼけた机が二脚の上に無造
作に展示用の写真がうす高く積まれていた。

この部屋は展示係室であり責任者は老人の斬
程前氏である。老人の説明によると、一つの
机の上の写真は南京で、もう一つは南京以外
の写真である。すべて第二次大戦中の中国の
写真である。私は、この様な写真の出所を聞
いた所、老人から次の様な返事が返って来た。

「当時、国民党軍と日本軍の戦いであり、
正確な資料は余り残って居ないので、当時発
行された雑誌や新聞からコピーして展示用の
写真を作っている」と。

今迄日本で問題になっていた写真の正誤論
争も、この一言で解決された様に思う。戦争
中の事でも在り、又、中国は戦後内戦の結
果、当時の支配者であった国民党が敗北して
共産党が支配する様になった結果、資料の紛
失は免がれることは出来ない。その為であろ
うか、私が日本で何かの本や写真集で見た写
真が机の上に在った。又、写真が、非常に不
鮮明である理由も理解出来た。そのうち、老
人が、一冊の写真集を大事そうに隣の部屋

から持って来た。それはぼろぼろになった
「日寇暴行実録」集で、当時の国民党軍事委
員会政治部編集である。本書は、老人が、国
民党の関係者から受取り、今では南京で唯一
冊しか残っていないとのことである。私はこ
れを手にとって見た処、今迄私が見て来た南
京事件その他の戦時中の日本軍の暴行記録写
真のほとんどが、ここに集められている。然



国民党軍事委員会政治部編集の
写真集の表紙「日寇暴行実録」

も、オリジナルであるだけに非常に鮮明であ
る。これを見て今迄発表されていたこの種の
写真の出所を知る事が出来た。私は、南京市
立博物館に来て、この種の写真の源をつきと
める事が出来て、そのすべてを写真に撮っ
た。しかし、私の技術では余り良い出来映え
ではないが、何しろ、オリジナルを見て来た
事は今回の旅行の収穫の一つであった。多
分、この種の写真はこれを元にしたコピー

か、又、そのコピーであろうと思う。
午後は、南京事件を研究して居られる南京
大学の歴史学の高助教から、最近の南京事
件の研究とその後の資料の発掘事情を宿舍の
南京飯店の一室で聞く事になった。高先生は
概要次の如く話された。

一九三七年七月七日に日支戦争が始り、八
月十三日に北京から天津、甘肅省、上海に拡
大し、十一月十一日に上海は日本軍に占領さ
れ、日本軍は南京に向った。日本軍の総指揮
官は松井石根大将であり、その下に第六師団
（谷師団）、第十六師団（中島師団）、第八師
団と末松師団の四個師団であった。

日本軍は三方面より攻撃して来たので、市
民は南京を離れることは困難であった。その
上、南京城外の西上に沿って流れている揚子
江の船は国民党の軍隊によって占領されてい
た。然も、国民党は南京を守る意志は無かつ
た。十二月二十日に国民党は首都を重慶に変
えた。この様な状況の中で市民と敗残兵の逃
げる処がなくなった。その為、南京が陥落し
て以来、翌年の春まで虐殺行為が続いた。

私はその証拠を見ました。

その一つは死体があらゆる処に在った。

又、紅十字社（赤十字社のこと）が死体を



高先生（中央後列）
南京飯店にて
筆者（中央前列）
（前列右3名）
証人（中央前列）

集めました。その上崇善堂（一つの団体）も死体を集めました。

この二つの団体だけで集められた死体は一万五三〇〇余であった。しかし、犠牲者の数は正確には出来ないが一つは、東京裁判に提供されている。

又、最近解ったことでは、南京市の博物館の近くの南京市西南上新町地区で二人（盛世、昌開運）が死体を集めて葬った。その数

は二万八七三〇名であった。又、芮芳緑、張鴻儒の二人が南京市の南の兵器工場花神で七〇〇〇名の死体を集めて葬った。

又、当時南京市長であり日本軍に協力した売国奴であった高冠吾は靈谷寺附近の死体三〇〇〇名を集めて埋め、その上に石碑「無主魂孤碑」を建てた。これらの数は占領内の六週間以内で二〇万以上にも達している。

一九四六年の国民党の地方移察庁の発表「敵の罪の報告書」によると三四万人と書いてある。

尚、一部では死体を集めることは出来なかった。すぐ西北の揚子江には船は無かった。その港であった下関に多くの市民が集ったが木片や椅子等につかまって江を渡ろうとしたが、途中で沈んでしまった人達が多かった。その上、日本海軍の軍艦がすでにそこに来て居り、艦上より逃げる市民を撃ち殺した。その為、この方面での犠牲者の数は今だに不明であり、あらゆる統計の中に入っていない。

次に安全区の問題を話しましょう。

十二月十二日現在では外国人が南京に残っていた。（彼等は中立国の国民であるから）その為、金陵大学のスミス・ペーター教授が、安全区（難民区）を設ければ、中立地帯

として市民の安全を守れると期待した。しかし、日本軍は敗残兵を探するという口実でしばしば、その地区に入ってきた。

金陵大学は、中央大学と合併して一九五二年に南京大学となった。当時中央大学は国民党の陸軍病院になって居り、難民区の外に在った。金陵大学は難民区の内であり、このような難民区は当時、南京には二十五ヶ処在ったが金陵大学が主な処であった。

最初、日本軍は難民区の住民に向って、「国民党の兵隊であることを名乗り出たならば故郷に帰す」と言ったので、難民区の中に逃げ込んでいた国民党の敗残兵が約七〇〇名程度名乗り出たが、日本軍は彼等を三つのグループに別けて殺した。一つのグループは南京大学の近くの金銀街の池の附近で殺された。第二のグループは山の方で殺されたが、後に天文台を設ける整地したところ多くの人骨が出て来て解った。その後にも、日本軍は難民区に入って、右肩が少し固い者、頭の上半分が日に焼けてない者、人差指がかたい者は元兵隊「敗残兵」として連行して行き、帰って来なかった。その他、南京における虐殺事件についてはまだまだ私達の方でも調査が進んで居ないが、日本で出版された資料（多分、

洞富雄氏の著書と思う（筆者）の中に散見することが出来る。又、イギリス人で当時南京に居たティンバリー氏が「外国人の見た日本軍の暴行」にも多くの事実が書かれている。

鈴木明氏が日本で色々と反論し「南京大虐殺のまぼろし」を書いているが、私達は、戦斗行為の中での犠牲者の事を言っているのではなく、ジュネーブ協定に違反した一般市民や、戦斗を止め、抵抗してない敗残兵に捕虜に対する日本軍の行為を問題にしているにもかかわらず、鈴木氏はそれを混同している。

新しい材料としては、谷將軍の起訴状が出たので「歴史檔案」の一九八二年の第四期で発表している。又、同誌には、一〇〇人切りで有名になった向井敏明、野田毅の二人の戦犯記録も掲載している。（この資料は筆者は持帰っている）又、谷部隊の四五中隊長であった田中軍吉が、軍刀（助広）で三〇〇名の中国人を殺した記録も在る。このことは、山中峰太郎の「皇兵」の中に田中が自ら中国人を殺す写真と共に出ている。

以上が高先生の話であった。この話で、私が南京事件について持っていた疑問のいくつかは解消された。その一つは、永い間の日本軍の中国侵略の中で、何故南京で殊に大きな

虐殺事件が起ったのか？ 第二は、犠牲者の数はどうしてあの様な状況で正確に数えられるのか？

第二の疑問については、高先生も言っているように、中国側も未だ正確に解っていないが、紅十字社等の団体が発表したものによっているが、その後、生き残りの関係者や発掘等の作業を通して今後も続けて行くとの事である。本格的に調査が始ったのは昨年の夏以来との事である。これは日本の教科書問題が起ってからであり、又、中国の国内事情としても四人組の追放後、歴史研究も「実事求是」になった事にもよると思う。その為、今後私も連絡し合って相互に南京事件に関する新しい資料、研究の交換を約束した。

第一の疑問については、その後の質問の中からも解った事であるが、南京を守っていた国民党軍は一〇万で攻める日本軍は二万であった。本格的には国民党が斗う意志が在れば相当抵抗出来たが、早くから南京を放棄し、重慶に移動する事にしてた為、国民党軍の戦意がなく、統制が乱れていた。その為、日本軍側としては予想以上に早く南京が陥落した為、数倍に余る敵軍と捕虜を常に相手にして居り恐怖感が在ったのではないかと思われる。

る。その上、上海から急速な攻撃で食糧その他の輸送が充分でなかった。その結果、日本軍の前線から捕虜の取扱ひ方について師団本部に問い合せた処、「捕虜を作るな」との返答が各地で帰っていることもその為であろう。その上、国民党の幹部が南京を放棄する時、揚子江に近い門を外から閉ざした上、すべての船を取上げてしまったことも、原因の一つである。その上、当時の日本軍は、ジュネーブ協定についての充分な教育を受けていなかった。即ち侵略軍であったこと等が複合して「南京事件」が起ったものであらうと考えられる。

尚、高先生との座談会の席には当時の様子を直接体験した証人の具体的な話も聞いた。その中の一人は東京裁判に証人として証言した人もあり、もう一人は、朝日新聞の本多勝一氏の「中国の旅」に出て来る陳徳貴氏の生々しい体験談を数時間にわたって聞いたが、「東京裁判の記録」や本多勝一氏の「中国の旅」と重複するので本稿では省いておく。

翌日午前中から南京市郊外の江東郷に向った。この地方は湿地で一面に葦が生えていた為、南京市内より逃げて来た市民が多く、彼等は昼間は葦の中に小舟を入れて隠れて夜食

事を求めていた。しかしそれも日本軍に見付かり、その多くは殺されたり暴行された。江東郷にはクリークが在り、当時、木の橋が架

っていたが戦斗で焼け落ちた。そうすると日本軍は、その附近の中国人の死体を元の橋の処に積み上げ、その上に草を敷いて橋に使っていた様である。しかし、それも永續きせず、木の橋が架けられ、「中島橋」(グラビア参照)と命名されていた。中島橋とは、当時



倉田徳貴(陳德貴)の証人としての江子揚(楊子江)の前

第十六師団長であった中島今朝吾中将の名前をとったものである。今では、セメントの新しい橋が架っているが永い間、中島橋の名前が書かれて居り、この地方では有名である。

江東郷は外国人としては私が最初に案内された様で、江東郷人民政府郷長を始め、政府関係者と共に、女性一人を含む体験者四名から直接、当時の様子を聞く事が出来た。ほとんどの人は家族を目の前で軍刀で殺されたり暴

行された体験者であり、話し途中で、当時の事を思い出して泣き出し、話しが途切れることがよくあった。

郷政府事務所での昼食の後、話の中島橋を渡って、万人抗に来了。(中国では多数の死体を埋めた処から多くの人骨の出る処を万人抗と言っている)ここは道から少しはずれた処で、最近昌の整地をした処、無数の人骨が出て来た。私が立った足元にも頭骨や手足の骨が小高い盛土地一面に無数に散ばっている。

この万人抗について多分知った人達が亡くなった離散してしまつたので解からなくなつたのであろう。高先生の話では、南京市の都市計画により道路整備や建築現場から今でも多数の人骨が出て来るとの事である。その為、手が廻らず、この万人抗の如く、今だに雨曝しのままである。私はこの現場を見て未だ戦後は終っていないと強く感じた。

第十六師団の中島師団は京都師団であり、京都には多くの関係者が居ると思う。真相を明らかにして、新しい日中関係を作るためにも、現代の日本人の思想を考えるためにも、関係者の勇氣ある発言を期待している。

尚、南京攻略に参加した四個師団の内、第十六師団以外は約十日間程の南京滞在后、



万人抗の人骨

再び中国軍を追って奥地に進軍したが、第十六師団は南京警備師団として南京に残つた。その様な関係上、中島師団は南京虐殺事件に一番関係が深い。

私は今回の「南京事件」取材旅行を通じてつくづく思った事は、この前の戦争に於ける日本の責任の重さと、今だにそれが正しく整理されていないことである。政府間では、国交回復による外交の正常化で終つたかも知れない。しかし、中国民族の心の中には、戦時中の事は忘れられないだろう。決して忘れられるものではない。この事は振返つて、日本人もこの事を決して忘れてはならないことである。この戦争責任をどの様に考え、整理しなければならぬことだろうか? 日本人にとつて戦後の最大の思想的課題であると私は思う。

(たかや さだくに 社会学部助教授)